



さい帯血バンクNow

第3号

新年度予算案
9億2830万円

さい帯血は35%増

保存数は6割増の8186個

●さい帯血移植推進事業費(単位:千円)

13年度予算	14年度予算案	対前年増額
686,295	928,303	242,008

- (1)日本さい帯血バンクネットワーク経費 33,215
※バンク数の増(9バンク→10バンク)
- (2)HLA検査費等 879,361
※保存個数の増(5000個→8186個)
- (3)情報管理経費 15,727

昨年暮れの12月25日、政府は平成14年度予算案を閣議決定しました。さい帯血バンク事業には国庫からの補助金もあって、その運営が行われています。さい帯血バンク関連の平成14年度予算案は総額9億2830万円で、今年度と比較して35%増となっています。緊縮財政下での大幅増は喜ばしいことではありますが、その内容をつぶさに見てみると、かなり問題点もはらんでいるものとなっています。

=関連記事2面に

“朗報”ながら負担増覚悟も

平成14年度の政府予算案でさい帯血バンク事業に対する補助金は、総額にして9億2830万円で13年度予算(6億8629万円)と比較して金額ベースで35%増となっています。この増額の要因となるのは、13年度は保存さい帯血の数が5000個であったのを、14年度には8186個と64%増やそうというものです。これは、さい帯血移植を望む患者さんには大きな朗報であります。

しかしながら、さい帯血バンク事業を運営する立場にとっては、数々の解決しなければならない問題点もあります。この保存数増加を実現するためには、さい帯血バンクは大きな負担増を覚悟しなければならないからです。

現在、日本さい帯血バンクネットワークを構成する全国9つのさい帯血バンクには、運営のために補助金が支払われていますが、それは運営費の一部であって、各バンクはそれ

ぞれの運営母体組織が独自に経費を負担している状況です。

現場の声を2面に掲載しました。

骨髄バンクはマイナス計上

平成14年度政府予算案では、さい帯血バンク関連が増加となっている一方で、骨髄バンク関連予算は平成13年度予算より若干のマイナスで計上されています。

ドナー登録費として計上されている日本赤十字社への補助金は前年度と同額の6億4892万円ですが、骨髄移植推進財団への補助金は、前年度が2億6463万円であったのに対し、新年度予算案では2億5695万円と3%減となっています。

また、保健所でドナー登録を受け付けるための地方自治体への補助金は、前年度比で3割以上カットされ、4154万円から2874万円へと減額されています。

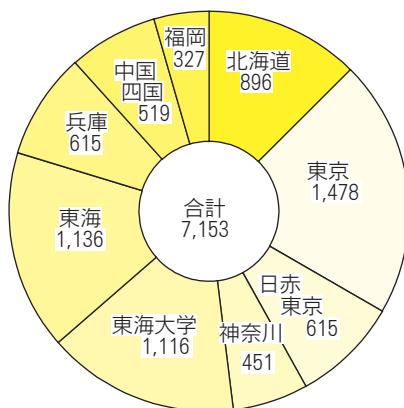
小泉内閣の聖域なき構造改革は、「必要などころには予算をつける」ということでしたが、移植の領域にも影響を与えています。

●各バンクの移植(供給)数

バンク名	~00年度	01年度	合計
北海道	57(60)	33(32)	90(92)
東京	72(73)	27(29)	99(102)
日赤東京	26(28)	2(2)	28(30)
神奈川	56(56)	4(4)	60(60)
東海大学	30(30)	27(28)	57(58)
東海	76(78)	24(22)	100(100)
兵庫	47(51)	32(33)	79(84)
中国四国	5(5)	5(5)	10(10)
福岡	11(13)	6(6)	17(19)
合計	380(394)	160(161)	540(555)

●保存さい帯血の公開数

2001年12月31日現在



【注】01年度は12月末日現在。数字はカッコ外が移植数、カッコ内が供給数。病院に供給しても、移植に至らなかったケースを含む。

予算案の 問題点

信頼と継続性が必要

第1の問題点は、保存個数64%という伸び率です。大幅増のためには、新規の産科病院の協力が必要となりますが、すぐに採取することはできません。

安全性保証に時間かかる

提供する妊婦さんや移植を受ける患者さんの安全性を保証するため、種々の約束事やトレーニングが必要であり、産科施設が実際に活動できるまでには半年程度かかります。

さい帯血の凍結保存も同様で、凍結保存スタッフの拡充も必要ですが、この技術も簡単ではなく、習熟期間が必要です。これらはバンクの努力で実行可能ですが、深刻な理由は厚生労働省が平成15年度以降のさい帯血の保存計画を示さない点にあります。

つまり、新年度8186個で次年度以降は今年度同様5000件としたら大幅ダウンですから、今度は産科施設や保存担当スタッフを減らさなければなりません。さい帯血採取を1年で中止すれば、産院の現場を混乱させるだけでなく、妊婦さんのさい帯血提供のご厚意を断ることになり、さい帯血バンクへの不信感にもつながりかねません。

保存計画を示さぬ厚労省

さい帯血バンクは道路を造ったりする事業とは性質が異なり、人の信頼の上に立った継続性が重要な事業です。

第2点は経費の問題です。予算案では保存数の増加に伴い、補助金も増額されています。しかし、保存数64%増で補助金35%増です。つま

り、さい帯血1個あたりで約2万円減り、年800個を保存するバンクは1600万円の減額となります。

各バンクは運営経費の不足を運営主体組織に依存する（人や設備をただで使うということ）という「いびつな」形で存在しています。このままの補助金体制では、「無償の」スタッフをさらに増員するか、借金をするかのいずれかとなることは明白です。

無償スタッフ増員か借金

このままでは、平成14年度末にはいくつかのさい帯血バンクが運営危機状態に陥ることになるでしょう。

（北海道臍帯血バンク・佐藤典宏）

さい帯血移植は着実に症例数も増え、さい帯血バンクに対して国民の期待も大きくふくらんでいます。そのために、さい帯血バンクが運営に

関して改善したり、果たしていかなければならないところはたくさんあります。

さい帯血バンク事業は補助金でまかなわれる公的事業ではありますが、その補助金は十分なものではありません。

また、補助金は時の政治的・経済的情勢によって増減する不安定なものであります。

このため、日本さい帯血バンクネッ

移植数に応じて保険会計から支払われるように、さい帯血に医療保険点数をつけるように国に要望しています。

さい帯血バンクの安定運営のため さい帯血に医療保険の適用を要望

今年4月は、医療保険の診療報酬などが改訂される2年に一度の時

トワークでは、保存さい帯血数が一定数になるまでは補助金による財政支出であっても、安定的な事業の推進のためには、実施されるさい帯血

期です。医療費総額の圧縮が話題となっているときではありますが、ぜひとも保険を適用してもらえよう、関係機関に働きかけを行っています。



すこやかに、幸せに。

明日への夢、描きたい。

NIPRO

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO

ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号

「ただ今、検討中」あれこれ

毎月開催の事業運営委員会

日本さい帯血バンクネットワークは常勤の事務局員が1人だけです。役員も委員もすべて無給で、さい帯血バンクのために様々な作業をしています。最高意思決定機関は総会ですが、日常の意思決定は毎月の事業運営委員会で行われます。現在、事業運営委員会で協議されたり、総会に諮るためになどに審議されている事項の一部を紹介します。

■国際協力

日本のさい帯血バンクで保存しているさい帯血を、海外の患者さんのために提供しやすいシステムを検討しています。

■中長期的展望

事業運営委員会の中に、中長期的展望を考える小委員会を設置し、さ

い帯血バンクやさい帯血移植の将来のあり方、さらに骨髄バンクとの関係などを検討し、その成果を国や外部の機関に働きかけていきます。

■技術指針の改訂

現在の技術指針は日本さい帯血バンクネットワーク発足前の厚生省臍帯血移植検討会で作成されたもので、新たなガイドラインづくりを進めています。

■損害保険の加入

万が一の事態に備え、移植に用いるさい帯血に損害保険をかけるべく検討し、保険会社と交渉を重ねた結果、保険加入の運びとなりました。

■複数さい帯血の同時移植

骨髄ドナーがいなかったり、細胞数が少ないさい帯血しか得られず、

移植のチャンスに恵まれない患者さんのために、複数ドナーから採取したさい帯血を同時に移植するという新たな取り組みの希望がありました。これを実験的医療と位置づけ、どのようなことができるかを検討しています。

■判定委員会の設置

これまでにない症例へのさい帯血移植の実施申請など、さい帯血バンクに対して期待が大きくなっていきます。こうした新たな事態などに対応するため、判定委員会の設置を検討しています。

■外部評価の実施

日本さい帯血バンクネットワークでは、事業評価委員会によって各さい帯血バンクの技術面、運営面での評価を行っています。外部による第三者評価も行うこととし、どのような外部評価をしてもらおうかなどの検討を行っています。

リレー
紹介③

日赤東京臍帯血バンク

東京都赤十字血液センター臍帯血バンク（略称：日赤東京臍帯血バンク）は平成7年度から活動を開始しました。当時の日本赤十字社中央血液センター研究部で採取・保存法、説明文と同意書の書式を決定するまでに1年以上の準備期間を経ています。

1年目はさい帯血採取量も採取

数も総体に低かったのですが、以来、ご協力いただくお母さんや採取協力病院、産科スタッフともども、さい帯血採取量や保存率も増加しています。

血液センターのさい帯血バンクですので、血液型、感染症マーカースクリーニング、HLA タイピングは検査部にお願いしています。



知名度・質ともアップ



さい帯血部門で担当する検査は、コロニーアッセイ、CD34 陽性細胞算定、無菌試験とサイトメガロウイルス、IgM 抗体検査です。

この7年間でめざましく変わったことは、“さい帯血”の知名度はもちろんですが、品質管理です。さい帯血の調製保存・検査に使う消耗品、薬品の類を写真に撮ってみました。それぞれのロット確認など、調製保存作業の大きな部分を占めています。

2001年10月からバンクの名前が東京都赤十字血液センター臍帯血バンクに変わりました。新体制でも同じ建物で同じスタッフが仕事に励んでいますので、よろしく願いいたします。

事業評価委員会が 各バンク現地調査

日本さい帯血バンクネットワークでは、参加さい帯血バンクに事業運営およびさい帯血の品質管理に関する内部評価として、毎年、事業評価委員会による現地調査を実施しています。

今年度は昨年の11月下旬から12

月中旬にかけて、事業評価委員が2人ずつ、9つのさい帯血バンクを訪ね、13施設（事務局と調製保存施設）の聞き取り調査と実施施設の現況を視察調査しました。

今回は、特にさい帯血の受け入れから、調製、保存、母子の健康調査、



凍結保存施設の視察調査



北海道臍帯血バンクを訪れた正岡徹・事業評価委員長ら

公開検索システムへのデータ送付、移植病院からの申し込みおよび出庫に至るまでの一連の業務において、各バンクがしっかりとした責任体制の下、業務が安全かつ迅速に行われているかどうかについて重点的に調査が行われました。

調査内容は、来月開催の事業評価委員会において報告・評価が行われ、総括報告書が3月の総会に提出されます。

また、年度内にネットワーク関係者以外の「第三者による外部評価」も行われることになっています。

凍結解凍 四方山話

ほとんどの家庭で冷凍食品が使用されています。最近ではなんといっても冷凍ラーメンやうどんなどの麺類が人気でしょうか？

日本の冷凍食品の歴史は1899年、魚類の出荷のために大阪に冷凍庫を作ったのが始まりとされています。食品としては1925年、東京・上野精養軒が冷凍食品を作ったのが始まりでしょう。

食品そのものの味を失うことなく、長期間保つということが冷凍食品の使命です。それでは、味が落ちるといったようなことなのでしょうか？

実は冷凍保存の問題は、水分が氷結することにあるのです。水分は摂氏4度より上がっても下がっても膨張します。冷凍によって細胞内の水

分が氷結すると、周りを押し広げます。解凍の際、溶けて細胞を破壊し、結果的に味が落ちることになります。これを防ぐには、何より急速冷凍が重要ということで、各社が技術を凝らしています。

大事なのは、温度差がないように一様に温度を下げて、大きな氷が出来ないようにして凍結させることです。解凍するときは各家庭に任されていますが、以前は「ゆっくり解凍」といって前日から冷蔵庫のほうに入れておくことが推奨されていました。

しかし現在は電子レンジで、数分で解凍することが一般的です。つまり、温度を一様にするのが重要なのです。電子レンジは表面も内部も比較的溫度差がないまま解凍ができます。

実はさい帯血でも急速冷凍・急速解凍という原則はお料理と同じです。「味」を保つことは、細胞を正常に保つことなのです。

米テロ事件でさい帯血がクローズアップ

昨年9月11日の米国同時テロ事件では即日、飛行禁止令が出されました。驚愕したのは日米の骨髄バンクです。全米各地で20人を超すドナーからの骨髄液採取が予定されていたからです。うち3人分は日本の患者さん向けでした。

全米骨髄バンクの提案によって、これらをチャーター機によって緊急輸送することになりました。15日夜、羽田空港に到着し、3病院では予定より遅れながらも骨髄移植が無事おこなわれました。

ある病院では「万が一」に備えて、さい帯血バンクネットワークを通じて、さい帯血の現物を確保しました。「コーディネートを必要としない」さい帯血バンクの特色が証明されました。